

2003年度「学校教育入門」の反省的考察

桜井 佳樹・高倉 良一・高木由美子・伊藤 正信・黒田 勉・田上 哲

(学校教育) (社会科教育) (理科教育) (保健体育) (技術教育) (教育実践総合センター)

760-8522 高松市幸町 1-1 香川大学教育学部

Consideration of the "Introduction to School Education" in the Year 2003

Yoshiki Sakurai, Ryoichi Takakura, Yumiko Takagi, Masanobu Ito,

Tsutomu Kuroda and Satoru Tanoue

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 本稿は2003年度に実施した「学校教育入門」に関する反省的考察である。1998年度より開始された「学校教育入門」は、香川大学・学校教育教員養成課程の「入門科目」として、また免許法上の「教職の意義等に関する科目」として重要な役割を与えられてきた。だが各コース・領域の代表者および教育実践総合センターの教員で構成されるメンバーのうち約半数が毎年入れ替わるシステムによって、「理念」の喪失と希薄化が生じてしまう危れがあることは否めない。本稿は『参観の記録』, 小論文, 学生に対する授業評価アンケートの調査結果を手がかりに, 2003年度の評価と今後の課題を明らかにしたものである。

キーワード 学校教育入門 理念と歴史 附属学校園参観 授業評価 教職の意義

0 はじめに

「学校教育入門」の担当者として, 2003年度の授業を運営するという貴重な経験を終えた。この授業がいったい何であったのか, 授業担当や学生に何をもたらしたのか, そもそも効果があったのか, 現在どのような課題を有しているのか, 次年度に向けて何を引き継ぐべきなのか, こうした諸問題を考察することは経験を整理し, 今後のより良い実践を構築する上で, 意味ある行為だと思われる。おそらく実践はしたものの, その意味を十分理解できていない教職経験の浅い教師が陥ると類似した心理状態になっているように思われる。もちろん経験豊富な教師であっても, 全く新しい授業に取り組まねばならなかった場合のパニックにも相当するだろう。

「学校教育入門」は香川大学教育学部・学校教育教員養成課程の各コース・領域および教育実践総合センターから各1名, 合計15名の教員によってティーム・ティーチング方式で運営されてきたものである。基本的に各教員は2年間の任務を経験する。1年目で「修行見習い」をし, 2年目に運営の中心となるというシステムが構築されてきた。筆者らは2002年度に「見習い」をし, 2003年度に「一人前」として主たる運営に取り組んできた。形式的にはなんとか終了したものの, 私たちが気づかない何らかの盲点が存在するのではなかろうか。たとえば「一人前」になった担当者にとっては, 前年度の実践が唯一の参照点であり, それを「模倣する」という行為になりがちである。何のためにこういう事を行っているのか, 一つ一つの取り組みの意味

を精査することなく、とりあえず前年度通りにしてしまう。ここにこの授業のアキレス腱が存在しているように思われる。つまり授業がシステム化されるとともに、理念の喪失が起こるのである。15人の教師間の意思疎通をいかに図るか、200人近くの受講生をどのように動かすのか。7つの附属学校園との連携をいかに図るか。こうしたコミュニケーション問題や15回の授業をいかに運営するかという問題に追われることになる。細かな雑務に忙殺されるなかで、そもそもこの授業はいったいどういう理念の下に構築されていたのか、その本質を忘却することになるのである。

したがって、こうして2003年度の授業を終えた今こそ、「理念に照らして」授業に反省的考察を加えることは意義あることだろう。

1 「学校教育入門」の理念と歴史

本学の「学校教育入門」の理念については4つの観点から論じられるであろう。

まず第1に本授業は、1999年度より新たに施行された「教育職員免許法」上の「教職の意義等に関する科目」に該当し、教員免許を取得しようとする者にとって必修科目に位置づけられているという点である。その中では(1)教職の意義及び教員の役割、(2)教員の職務内容(研修、服務及び身分保障等を含む。)、(3)進路選択に資する各種の機会の提供等を含めなければならないとされており、その意味で本授業がこの趣旨を十分に生かしえているのか、さらなる検討が必要だと思われる。ここでは特定の校種や教科の教員の職務ではなく、教職全般が問題になっていることに注意を払わねばならない。その意味で特定の校種だけでなく、3種類の異なる校種の学校参観を義務づけていることは教職全般の理解を進める意味で意義深いことであろう。

第2に、香川大学教育学部が1998年度改組を断行して作り上げた学校教育教員養成課程の理念に起因するといえよう。つまりそこにおいては一括入試を行い、1年次はコース・領域に所属

させず、「教職科目」などの共通教育を行うという制度改革を行ったことに関連するのである。その象徴的存在が「学校教育入門」である。これは「教育職員免許法」の改正を1年先取りしたものであるとともに、免許法上の「教職の意義の理解」と「進路選択」を単なる観念的な知識教授に狭めるのではなく、1年間かけて教職を理解し、主体的に「進路」を「選択できる制度」に作り替えたという点で、理念の実質化をもくろんだ作業であったと思うのである。その意味でこの理念が忘却されたとき、無駄な1年間を過ごしているのではないかという批判が繰り返されることになる。私たちは何故1年間コース・領域に分けないままにしているのか、その1年間において学生たちにいかなる教育を行うべきかつねに想起することが必要なのである。

第3に現在の「学校教育入門」が単なる講義形式で行うのではなく、学生の「参観」「討論」「表現」という3つの行為を通して、教職意識を呼び起こすことをねらっているという点である。そうした「体験学習」によって、入学したばかりの1年生に教職への興味と自らの教師像を主体的に形成させようとしている。こうした学習方法が教職意識形成に有効であるというのは、1996年度以降の旧小学校教員養成課程で行われた授業・「初等教育研究」¹⁾ 以来の経験によるものなのである。教職意識の形成を図る授業方法論を探究した一定の成果である。

第4には「学校教育入門」が3年次教育実習を主として、教育実践力ある教員の養成を目指した実地教育体系カリキュラムのなかで、スタート地点としての重要な位置を占めているということである。4年生に学部教育の理論研究の集大成として教育実習を行ってきた従来のあり方を変え、早い段階から実践に触れ、実践の中から課題を見つけ、実践を通して実習以後も大学にて学ぶという新しい理論実践関係に変わってきているという点である。

以上のように「学校教育入門」の理念は歴史的に形成されてきたものであり、それは当初主体的にその形成に参画してきた者(親の世代)にとっては、常識的なことであろうが、その歴

史を知らず、その任務を任される子ども世代にとって見れば、その理念を学習することは意義あることなのである。現在のように昔を懐かしむ声が大きくなるとそれはなおさら必要なことである。様々な実際上の問題が障壁となってその理念の実現が妨げられてしまう。もちろんその理念を絶対視してはならないが、その理念を隠蔽したり、抑圧することは好ましくない。この理念をさらに精査・吟味することが必要なのである。

2 2003年度「学校教育入門」の授業内容

今年度の授業内容は以下の通りであった。

第1回	4月14日(月)	オリエンテーション
第2回	4月21日(月)	自らの学校体験を振り返る(各クラス)
第3回	4月28日(月)	現職教員によるシンポジウム(全体会)
第4回	5月12日(月)	参観の視点と心構え
	5月18日(日)	養護学校運動会参観
第5回	5月19日(月)	クラス討論：養護学校運動会の体験交流と小学校参観の課題(クラス→全体会)
第6回	5月26日(月)	高松小学校参観
第7回	6月2日(月)	クラス討論：高松小学校参観の体験交流と課題検討
	6月6日(金)	坂出小学校参観
第8回	6月9日(月)	全体会2会場：小学校参観の成果と課題
第9回	6月10日(火)	坂出幼稚園 高松園舎参観
	6月13日(金)	高松中学校参観
	6月16日(月)	坂出中学校参観
第10回	6月23日(月)	クラス討論：幼稚園・中学校参観の体験交流と課題検討
第11回	6月30日(月)	全体会2会場：幼稚園・中学校参観の成果と課題
第12回	7月7日(月)	養護学校参観
	7月8日(火)	養護学校参観
	7月9日(水)	養護学校参観
第13回	7月14日(月)	クラス討論：養護学校参観の体

験交流と課題検討

第14回 7月28日(月) 全体会2会場：養護学校参観の成果と課題
全体会1会場：まとめ(今後の課題／コース・領域ガイダンスに向けて)

2003年度の授業方針および授業内容は、2002年度のを踏襲した。2002年度の実践内容については、『香川大学 教育実践総合研究』第7号に詳細な記述がなされているので参照して欲しい²⁾。小学校と養護学校は全員が訪問する。小学校は高松小学校(5月26日)か坂出小学校(6月6日)のどちらか、養護学校は4つのグループに分け、養護学校運動会(5月18日)及び7月7日、8日、9日の養護学校参観のどれかに配属した。さらに中学校か幼稚園の参観を選択させ、坂出幼稚園または高松園舎(6月10日)、あるいは高松中学校(6月13日)または坂出中学校(6月16日)のどれか一つを参観させた。事前に学生の希望を取るものの、定員等の問題があり全員の希望をかなえることはできないのが現状である。

学校園を訪問する前に参観の視点と心構えについて校種別に講義した後、小学校→中学校・幼稚園→養護学校の順で参観する。そして参観後はクラスにて体験交流と課題検討を行った後、全体会を2会場に分け各クラスがポスター発表を行った。各クラスは7組あり、1組から6組までは教育学部・学校教育教員養成課程1年生が各クラス25人ないし26人で構成しており、各組に2名ずつの教員が担任としてクラス運営に当たった。7組は教育学部・人間発達環境課程及び他学部の2年生以上の学生で構成され、担任教員3名を配置した。

2002年度との違いを敢えて述べるならば、学生が学校参観の際に常時携帯する『学校教育入門 参観の記録』を大幅に改訂し、内容を充実させるとともに使いやすいものにしたこと。毎年行われている現職教員によるシンポジウムのシンポジストとして、本年度香川県教育委員会より交流人事の一環として香川大学教育学部に

初めて派遣された教員3名（元小学校教諭，元中学校教頭，元香川県教育センター次長）の方々に登壇いただき，教職を選んだ理由や教職の魅力についてなどをお話いただいたことである。

3 学生の学習経験の分析

3. 1 校種別の考察

受講生は，この授業から何を学んだのだろうか。まず上述した『参観の記録』の記述内容から考察したい。

3. 1. 1 小学校参観

『参観の記録』では「子ども」「教師」「その他」の項目で参観前に何を見たいかを記述させ，参観中はワークシートに授業及び授業以外の場面において三つの項目について観察したことを記録させ，そして参観後に参観を通して感じたことや考えたことを記述させた。

高松附属小学校では全校朝礼，各クラスの朝の会，1校時・2校時の授業を参観し，30分の講話・質疑応答を体験した。一年生のクラスを参観した学生は子どもたちが「授業中も休み時間も元気だった」ことに率直に驚く。また別の学生は「40人みんなに目が届くように机の間をよく動いていた」ことや「子ども達がよくできたときは名前をあげてほめてあげ，うるさい時や指示を聞いていない時にはしっかりしかって，めりはりがついていた」と教師の指導方法に注目した。「小学校の先生になるためには，根気とアイデアが必要だと思う。そして何よりさらに，生徒の目線に立って話すことが大切なのである」と小学校教師の特徴をつかんでいる者もいた。

3. 1. 2 中学校参観

小学校参観の後なので，例えば板書の仕方の違いや自ら発言しなくなる中学生に対する発表のさせ方など，小学校と中学校の違いについて，興味を持って臨んだようである。また「中学は荒れているという」イメージが本当なのかという観点で見ようとする者もいた。「小学生と比べ

て授業に対する意欲や集中力が欠けている子が多かった」と指摘する者もいた。また「例えば参加型の授業であった英語などは大変意欲的であった。全員が作文を書いていた国語でも，全員が下を向いて一生懸命取り組んでいた。（一般の中学校ではまずありえないと思うが…）」と中学生，とりわけ公立中学校や自己の体験に照らして附属中学校の特徴を見た者もいた。この学生は「研究発表会という事もあり，生徒と観察者の両方に気を配ったような授業だったような気がする」と研究発表会の特殊性について観察していた。

3. 1. 3 幼稚園参観

三歳児と四歳児の違い，成長について気づいたり，幼児が一般に「キャラクター，字，時計」などに興味を持っていること，興味が次から次へと移るという特性を指摘した。また特に自由保育の時間では，子ども一人一人に目を行き届かせることの難しさや，危険だと思われる幼児の行動に教育実習生がどの程度介入すべきかという点について考えさせられたようである。

3. 1. 4 養護学校参観

ほとんどの者にとって，未知の体験であり，一般の学校との違いから参観しようとした。8人の子どもの3人の教師が配置されていることや，スキンシップや繰り返し，視聴覚に訴える教材の工夫などに違いを見つけた。運動会に参加した学生は「普通学級の生徒に比べると確かに接しにくいところもあるけれど，心で感じるものは皆いっしょなわけで，内面から見ていくことが大切なんだと思いました」とむしろ共通点の方に目を向けた。

3. 2 小論文

小論文は昨年度本格的に導入されたものである。2002年度の方法を踏襲し，前期のすべての授業が終わり，12月中旬に提出させた。400字詰め原稿用紙で7枚から10枚を条件とした。7月28日の前期最後の授業で小論文の趣旨やねらい，書き方等について指導した。小論文の内容は，

参観の際に気づいたことや疑問に思ったことを出発点とし、参考文献を3冊以上読んで単なる感想文にならないように指導した。

3. 2. 1 小論文のテーマ

あるクラスの学生たちの選んだテーマを列挙すると以下の通りである。「子どもにとっての『遊び』とは?」「小学生から中学生へ」「ひとは何のために学ぶのか」「教師の未来像～教師の変容から考える～」「集中できない子どもたちの現状について」「私の学校教育入門」「幼児の内面の働き」「『ゆとり教育』で子どもにゆとりは生まれるか?」「人間の形成について」「子どもはなぜ教師の人間性を見抜けるのか」「小学校低学年の現状」「障害児教育と音楽」「現代の教育の変化と問題」「児童と不登校」「目の輝きを大切にした教育」「これからの教員に求められるもの」「現在の教師の姿」「教師が子どもに及ぼす影響とは」「教師について考える～教師に求められるもの～」「家庭におけるしつけの必要性」「学校崩壊という現象」「ゆとり教育の行方」「学習評価について」「特別支援教育の現状」「いじめと道德教育」「子どもと接する」以上26編であり、いずれも力作揃いであった。

それらの内容を分類すれば、子ども論9編、教師論7編、授業論4編、教育問題6編であった。特定の専門分野というよりも、「教育・学校教育」全般を考察の対象とするものであり、「教職」全般への意識形成をねらいとする授業としては、テーマ選択としては妥当なものと言えよう。そのうち附属学校園の参観体験を中心に論じているものが、14編であった。それ以外にも附属学校の観察から発した問題意識を発展させたものや、自己の教育体験を主として論じるものもある。附属学校園参観と直接関連性は見られないが、絶対評価の問題や特別支援教育の問題、いじめ指導の問題など今後教員になれば直面せざるを得ない問題を文献研究として論じた完成度の高い論文もある。教職への関心や意欲の喚起という意味でいえば、小論文は総じて効果を有していると言えよう。

3. 2. 2 観察と小論文の関係

もちろん課題もある。観察したことを小論文の内容に生かすように十分指導したかという問題や彼らの関心に見合う参考文献の丁寧な紹介をしているかという問題もある。附属学校園の観察を小論文に生かし切れず、例えば「人間形成論」という他の教育原理的な授業でも扱える内容を書いたものもある。しかしわずか半日の附属学校園参観で何を見ることができなのか、見せられるのかという制約がある中で、学生は真摯に課題に取り組んだと言えよう。学生が必ずしも理想的なものとはいえない教育の現実（例えばクラスの子どもの数など）から感じたことや考えたことから教師や教育のあるべき姿や理論を探求した点は、十分評価できよう。

3. 3 教職の意義

『参観の記録』の最後には「教職の意義」について記述させている。小論文が若干専門的に論じられるのに対して、ここでは受講生の思いがストレートに表現されている。受講生がこの授業から何を学んだのか、「教職の意義」はどのように理解されたのか。以下典型的なものを取り出してみる。

「教職の意義とは様々な生徒と出会え、成長に関われるという事だ。参観を通して、一つのクラスごとに生徒が全く違うし、小・中・養のそれぞれでまた、生徒の性格も対応のしかたも、教育方法も違う。…」

「今の私が思う教職の意義は、努力することをいやがらないことだと思う。」

「自分の目指すものに向けて精一杯頑張りたい。教師としての生きがいを見つけることが、人生の目標であり、良い教師であると思う。」

「学校社会にはいじめや不登校などさまざまな問題点があるが、その問題から目をそらさず、子どもたちみんなが、安心して楽しく学習したり、過ごせる空間を整えてあげることが教員の大きな仕事であると思う。」

「子どもの変化、家庭の変化、社会の変化、学校の変化などいろんな変化に臨機応変に対応し、青年期という複雑な年代の子どもの心の支えになり得る存在であるという事が一番重要な教職の意義だと私は考え

ている。」

このように、受講生は教職の意義を捉えている。客観的な知識としては教職の意義をまだ理解したとは言えないであろうが、1年生なりに主体的な意味では教職を十分に理解しようとしているといえるだろう。附属学校園観察による教職の意義および教員の役割、教員の職務内容についての理解は断片的なものにとどまらざるを得ない。それらは進路選択についてのガイダンスと関連づけながら後期の授業においてさらに発展させる必要があるといえるだろう。

4 学生の授業評価——アンケート調査とその結果

本授業の最終日（2003年7月28日）に受講生を対象として本授業に関するアンケート調査を行った。調査の目的は、今年度の「学校教育入門」の授業評価を行い、来年度以降の本授業のあり方及び教員養成教育について検討するための基礎資料を得ることにある。調査問題は、若干異なる内容の設問もあるが、昨年と同様、受講生の授業への取り組み、満足度や、担当教員に対する評価、授業内容の適切性などから構成した。また、昨年度長谷川ら³⁾によって実施された調査結果と比較参照できるものについてはそれらを行うことにより年度による差異の有無を調べた。調査対象は、2002年（平成14年）度は学校教育教員養成課程1年次生134名、それ以外の2年次生40名、2003年（平成15年）度は同じく1年次生142名、2年次生41名であった。

4. 1 授業などに関する設問

「学校教育入門」の授業やコース・領域の選択について学校教育教員養成課程1年次生については21項目、2年次生については、コース領域選択に関する設問をのぞく18項目の設問に対して、

- 1) よくあてはまる（図中円グラフ ++）
- 2) どちらかといえば当てはまる（同 +）
- 3) どちらともいえない（同 ±）
- 4) どちらかといえば当てはまらない（同 -）

5) 当てはまらない（同 --）

の中から選択回答を求めた。さらに、昨年度との比較では、昨年度と結果をあわせるために1), 2)を選択したもの肯定的回答, 3)を中立的回答, 4), 5)を選択したものを否定的回答としてまとめた。設問は以下の通りである。

- ア 総合的に判断して、この授業に満足している
- イ この授業には積極的に取り組んだ
- ウ この授業を受けて、「学校」や「教育」について学ぼうとする意欲がわいた
- エ この授業を受けて、教師になる自覚や意欲が強くなった
- オ 授業のメニューや全体的構成は適切だった
- カ 大学教官の指導・取り組みは適切だった
- キ 附属教官の指導・対応は適切だった
- ク 現職教員によるシンポジウムは有意義であった
- ケ 附属学校園を訪問し、保育や授業などを観察できて良かった
- コ 3回の附属学校園訪問の回数は適当である（否定的回答の場合は、適当と思う回数を欄外に記入するよう求めた）
- サ 附属学校園で観察した内容は有意義であった
- シ クラス討議では、いろいろな意見が聞けて有意義であった
- ス クラス討議の仕方やクラス運営は適切だった
- セ クラス討議の内容を全体会で発表できて良かった
- ソ 全体会では、他のクラスの意見を聞いたり、発表の様子を見たりすることができて良かった
- タ 全体会の運営は適切だった
- チ 教職に就くために、どのようなことを学べばよかった
- ツ この授業を受けて、今後大学でどのようなことを学びたいかはっきりした
- テ この授業を受けて、どのコースや領域を選択すればいいかはっきりした

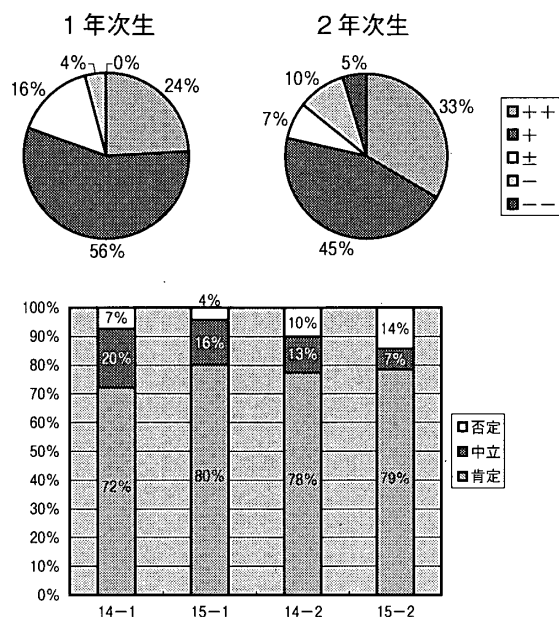


図 1 総合的に判断して、この授業に満足している

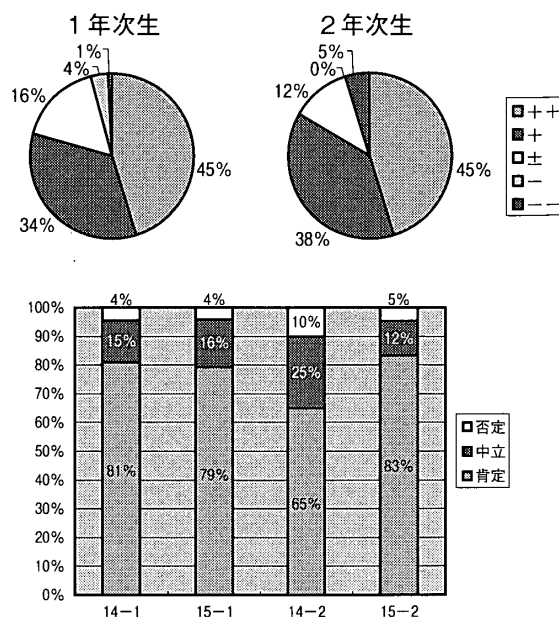


図 3 この授業を受けて、「学校」や「教育」について学ぼうとする意欲がわいた

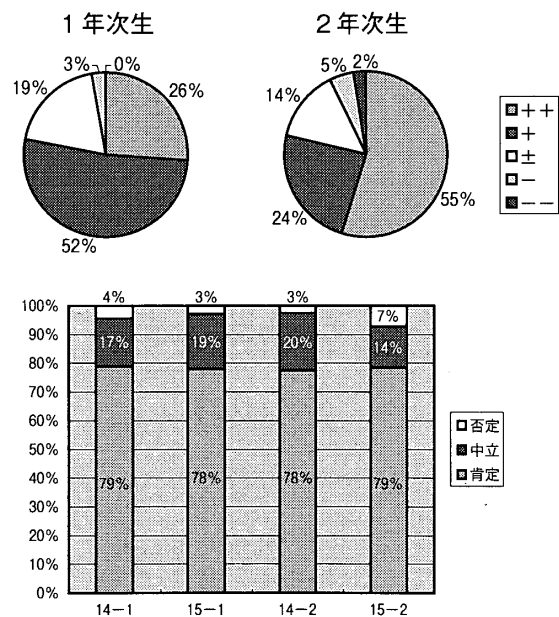


図 2 この授業には積極的に取り組んだ

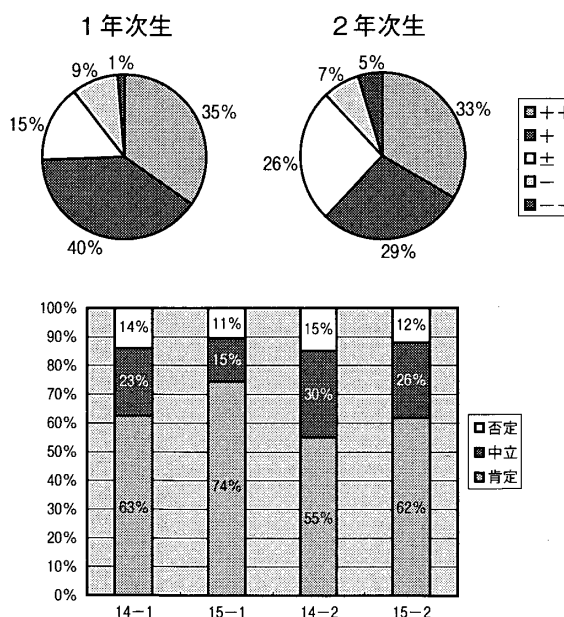


図 4 この授業を受けて、教師になる自覚や意欲が強くなった

ト どのコースや領域を選択するかは入学当初から決めていた

ナ 希望通りのコースや領域に進めるかどうか不安だ

(テ, ト, ナは 1 年次生のみ回答)

昨年度は、卒業後の進路希望の調査も併せて行い、強く教師になることを希望しているものとそうでないものについて調査を行い、3群(強教師群, 弱教師群, 教師以外群)×2回答(肯

定的回答, 否定的回答)の分割表に対してカイ2乗検定を行い、いくつかの質問事項において有意差がみられている(ウ, エ, シ, ツ, ト, ナ)。本年度は、その調査は行っていないため、検定を行うことができなかった。左記以降に示す図⁴⁾の順序は設問の順序に従った。

「満足感」(図 1.), 「積極的な取り組み」(図 2)については、昨年度も今年度も全体で 7 ~

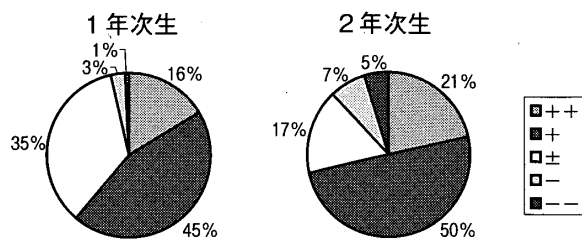


図5 授業のメニューや全体的構成は適切だった

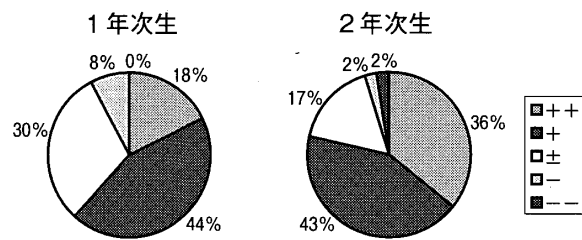


図7 附属教官の指導・対応は適切だった

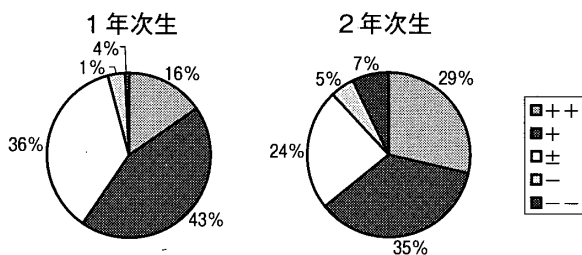


図6 大学教官の指導・取り組みは適切だった

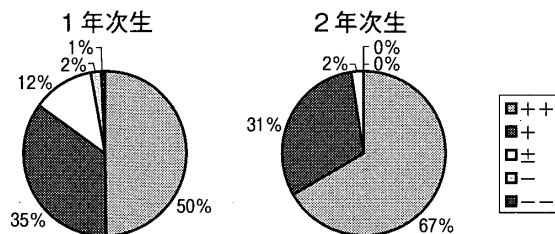
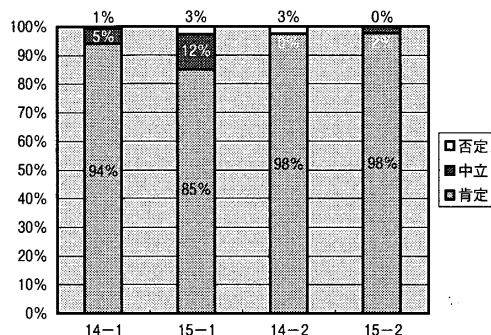
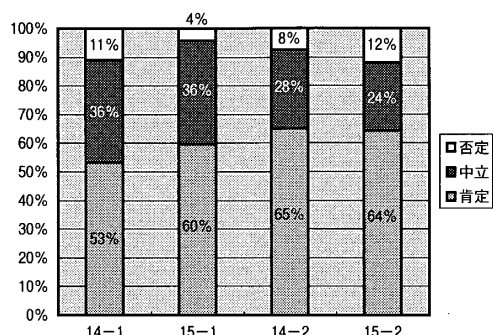


図8 現職教員によるシンポジウムは有意義であった



8割のものが好意的に回答しており、否定的な意見は少数である。このことから、授業に対する満足度は高く、受講生は授業に積極的に取り組んだといえる。

「『学校』や『教育』について学ぼうとする意欲」(図3)、「教師になる自覚や意欲」(図4)は、1年次生、2年次生では差がみられた。今年度は特に他学部の学生が多く在籍している2年次生でも学校や教育に対して学ぼうとする意欲がわいたことが伺える。しかし、教師になる自覚や意欲に関しては中立的な回答の割合が1年次生、2年次生ともに相対的に(図3と比べて)多いことがわかる。この設問に対しては、昨年の調査では有意に強教師群では肯定的回答が多く、教師以外志望群では否定的回答が多かった。教育や、学校に対する興味が増すと、教師になる自覚が芽生えと考えると、本授業において今まで学校、教育に興味がなかった学生に対しても強い興味付けを行うことができたが、教師

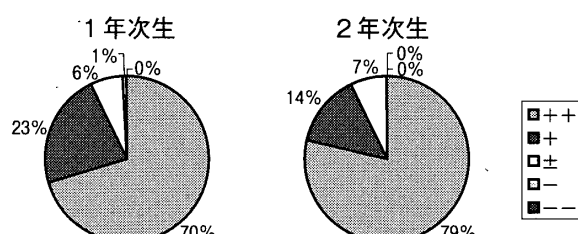


図9 附属学校園を訪問し、保育や授業などを観察できて良かった

になる意欲を高めるまでには至っていないと考えることができるかもしれない。しかし、志望の強弱をさておき、教職を志望している学生にとっては本授業は適切な授業であったといえよう。

「授業のメニューの適切さ」(図5)や、「大学教官の取り組みの適切さ」(図6)「附属教官の指導の適切さ」(図7)については、中立的な回答をするものがそのほかの回答に比べて割合が多くなっているが、各教官の取り組みに対しての中立的意見は、昨年度に比べると少し軽減さ

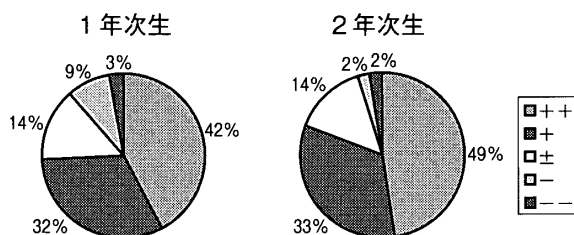


図10 3回の附属学校園訪問の回数は適当である
(4, 5を選択した者は、適当と思う回数を欄外に記入)

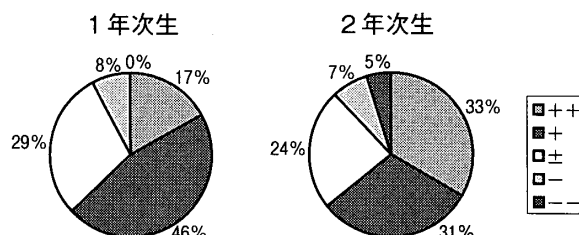


図13 クラス討議の仕方やクラス運営は適切だった

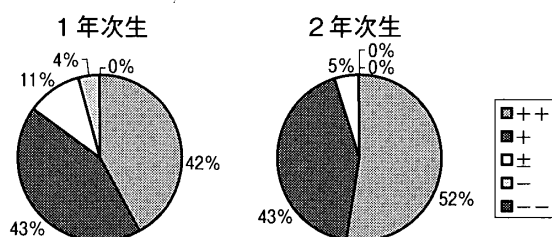


図11 附属学校園で観察した内容は有意義であった

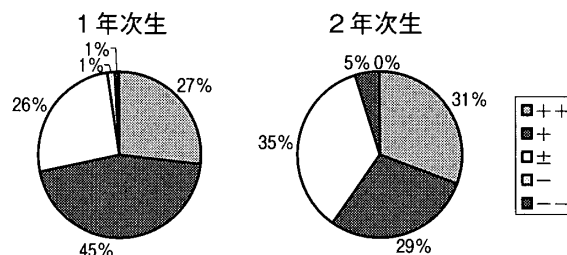


図14 クラス討議の内容を全体会で発表できて良かった

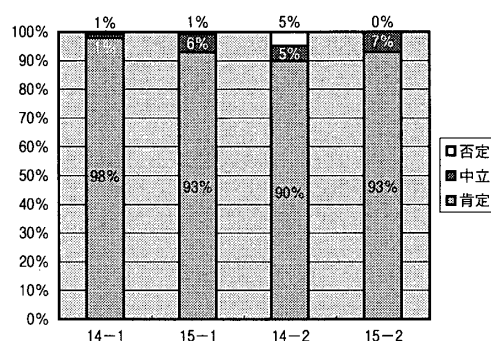
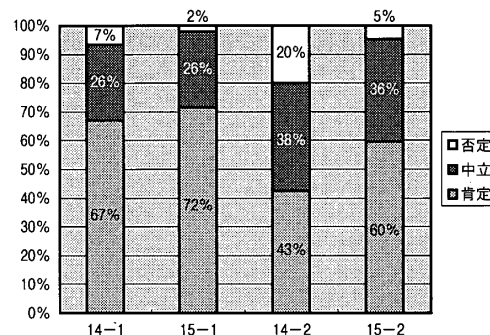


図12 クラス討議では、いろいろな意見が聞けて有意義であった



様、肯定的回答が非常に多い。附属学校園の観察については++の回答を寄せたものが1年次生、2年次生ともに7～8割と非常に高い値を示している。「附属学校園訪問の回数・意義」(図10, 11)に関しては、満足度は高いものの若干中立的な立場が増えてくるようである。

「クラス討議に関する設問」(図12, 13, 14)では、「意義」(図12)は認めるものの、「クラス討議の仕方」(図13)や、「全体発表会」(図14)については中立的な意見が多くなった。特に2年次生について全体会に対する中立的、否定的回答が多い。本学部以外の学生が多く占める2年次生は発表の準備が困難であったことが一因ではないかと推測される。「全体会で他のクラスの意見を聞くことができた」(図15)という設問に対しては肯定的回答が1年次生・2年次生ともに8～9割を占めることから、全体会の意義は認知されている一方、「全体会の運営は適

れている。「現職教員のシンポジウム」(図8), 「附属学校園の訪問」(図9)に対しては昨年同

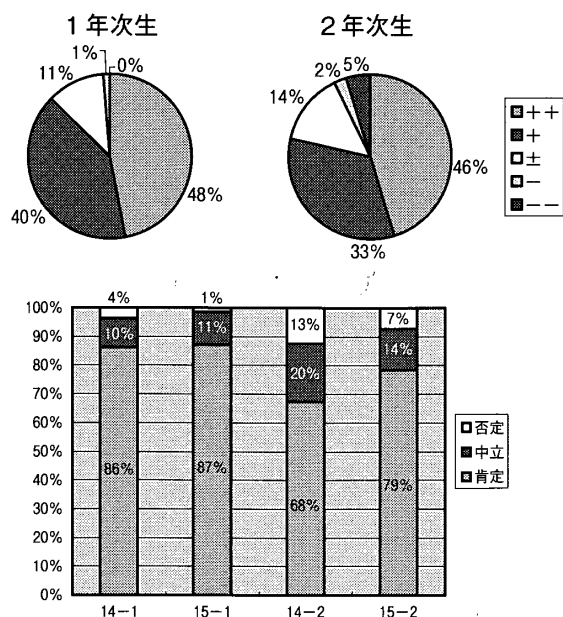


図15 全体会では、他のクラスの意見を聞いたり、発表の様子を見たりすることが出来て良かった

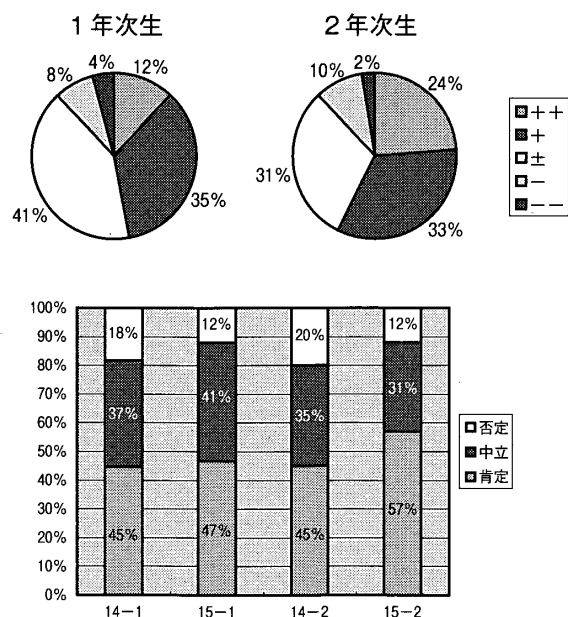


図18 この授業を受けて、今後大学でどのようなことを学びたいかはっきりした

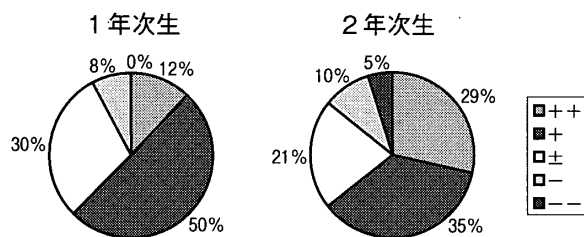


図16 全体会の運営は適切だった

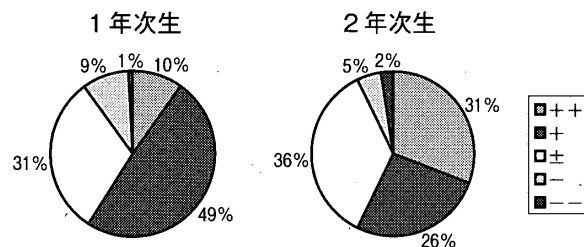


図17 教職に就くために、どのようなことを学びべきかわかった

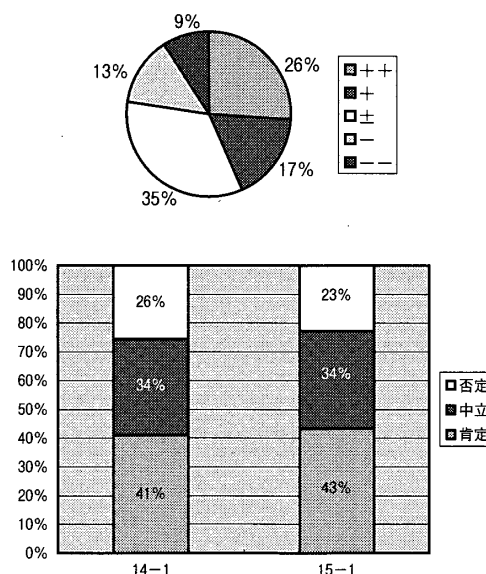
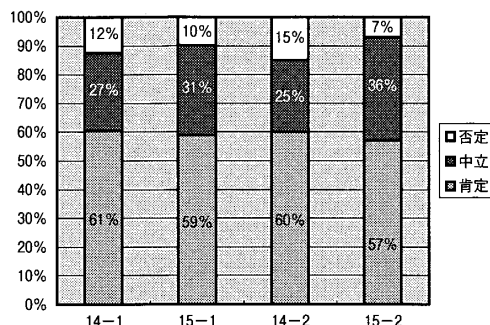


図19 この授業を受けて、どのコースや領域を選択すればいいかはっきりした

い。大人数のため、後ろではポスターが見えにくいなどの問題がある可能性があり、今後のさらなる検討課題である。

「教職に就くために、どのようなことを学びべきかわかった」(図17)、「この授業を受けて、今後大学でどのようなことを学びたいかはっきりした」(図18)に対する肯定的回答は5～6割程度にとどまっている。特に後者は、否定的回答の割合が1～2割程度と今回の設問の中では多くなった。この設問は、昨年の調査結果では、1

切だった」(図16) などに対する回答からもうかがえるように、運営に関して中立的な意見が多

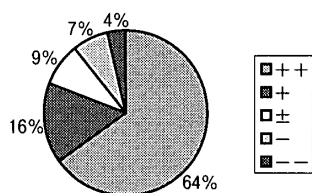


図20 どのコースや領域を選択するかは入学当初から決めていた

年次生強教師群で肯定的回答が多く、教師以外群ではその逆になるという結果が得られている。

4. 2 コース領域選択に関する設問

以下の3項目はコース選択に関する1年次生のみを対象にした設問とその回答である。「この授業を受けて、どのコースや領域を選択すればいいかはっきりした」(図19)については、肯定的回答は昨年度とほぼ同様の4割程度である。「どのコースや領域を選択するかは入学当初から決めていた」(図20)「希望通りのコースや領域に進めるかどうか不安だ」(図21)に関しては++を回答している学生が6割強、全体でも肯定的回答が7~8割を占めており、昨年度と大差ない結果を示した。

4. 3 自由記述

自由記述欄「この授業を受講しての感想や意見、あるいは要望や改善点などを記入してください」に記載されたものを、①(「学校教育入門」の全体的な評価に関するもの)、②(学校訪問に関するもの)、③(全体会の運営に関するもの)④(進路ガイダンスに関するもの)の4つに区分し、紙幅の都合上若干を例示する。

- ①(「学校教育入門」の全体的な評価に関するもの)、
「学校訪問を経験してすごくためになった。よりいっそう教師になりたいと思う。」

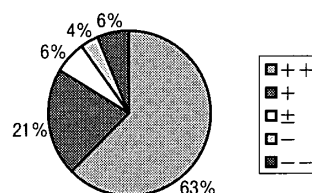


図21 希望通りのコースや領域に進めるかどうか不安だ

「附属学校に行って、小・中・高のどの教員になりたいかが分からなくなった。少し混乱したけど視界が広がったのはとてもうれしいことだ。それにしても小論文の枚数多いですね。けど3校も行ったし、書きたいことはたくさんあるので適当かもしれませんね。」

「初めは先生になるといってもあまり目標がさだまっていなく、何をしたいのか具体的に分からなかったけど、入門を通して自覚を持つことができたように思います。」

「この授業を受講して、小・中・養護学校の教育について考え、コース選択を改めて考えるようになった。じっくり考えてみたい。」

「授業を行うために教科の勉強だけでは分からない、生徒との接し方や学校・生徒の状態などが分かったので、教員になるためにはとても大切な事で良かったと思いました。」

②(学校訪問に関するもの)

「学校訪問ができて、それを通じて子どもと接することができてよかったと思います。」

「1年生のうちから参観できたことで教師になるための実感がわいた。養護学校の参観で子供と触れ合えない人がいたことは改善すべきである。」

「附属以外の学校へ行けるようにすればいいかも。」

「附属学校への参観はとても貴重な経験ができたと思います。もっとたくさん子どもとかかわれる時間があればいいと思います。」

「小・中学校、養護学校に行けてよかった。小学校で

は子どもと接する機会が多く、勉強になった。また養護学校でも想像とは違う部分もあり、実際に行けてよかった。ただ、中学校参観は授業参観というものを見るという形で子どもの本当の姿を見ることはできなかったのが残念だった。」

「全体会とかよりも、訪問を増やした方がよいと思った。教育実習の前に訪問を数多くすることで先生としての立場での学校に慣れることができた方がよいと思った。」

「改善点としては後期にも学校参観できたらいいと思う。」

「参観内容を子どもや教師ともっと関われるものにしてほしい。」

「附属学校園での参観の回数を増やすなどして、もっと多くのクラスの生徒を見たかった。幼稚園と中学校の両方を参観したかった。」

「附属学校園の授業参観において授業が偏らないようにして欲しい。自分の希望するコースの授業（一次調査に基づいて）が見られるように配慮して欲しい。」

「研究会や附属学校の優秀な生徒を参観する以上に一般の荒れた学校が見たかった。その方が有意義だと思う。」

③（全体会の運営に関するもの）（略）後掲、5、結語的考察 5. 2全体会の運営を参照。

④（進路ガイダンスに関するもの）

「自分の希望するコースに行けなかったらどうすればいいんでしょうか？」

「入学前にある程度の範囲でコース分けをしておくべきだ。幼教に進みたくて入ったのに進めないかもしれない人がいるのはおかしいと思う。」

「希望のコースに進めるかどうか非常に不安です。」

「1年のうちに附属学校園を訪問できたのはよかったと思う。よい刺激になった。私は推薦入試で入ったけれど、後期の領域ガイダンスには出なければいけないのなら、それは疑問に思う。領域がすでに決まっているので、ガイダンスは不必要だと思う。」

「できるだけ希望の領域にいけるように考えて欲しいです。」

4. 4 考察

本授業は、主として「附属学校園訪問→クラス討議→全体会」のサイクルを3回繰り返すこ

とによって、幼児・児童・生徒や附属学校園の教員とふれあう機会を持つこと、体験交流やディスカッションを行い自己と教育との関わりについて考えること、学校や教育について考える素地を養うこと、プレゼンテーションの方法を知ることなどを目的として実施された⁵⁾。本年度も昨年度と同様、本授業に対する肯定的な回答が大半の設問で顕著であった。特に附属学校園訪問や現職教員シンポジウムに対して有意義であったと回答する学生が多かった。また「『学校』や『教育』に対する関心が高まった」と回答する2年次生が増えたことも特筆できる。

一方、「教職に就くために、どのようなことを学ぶべきかわかった」（図17）という設問に対する肯定的意見は他の設問と比較して5割弱～6割と比較的低い。今後、1年次の早い段階で学びの目標を定めることができるような対策を講じる必要があると思われる。

コース領域選択に関する設問に対する回答も、昨年度、本年度ともにほとんど変化なく、8割以上がコース領域を入学当初から決めており、「この授業を受けて、どのコースや領域を選択すればいいかはっきりした」（図19）に対する否定的な回答の割合は2～3割で全問中最も高くなった。「希望通りのコースや領域に進めるかどうか不安だ」（図21）という設問に対して++と回答した学生は本年度は6割で、これらの不安への対応を充実させる必要がある。本年度もコース領域の紹介は各担任が全体会においてそれぞれ口頭でおこなったが、2004年度はさらに進めて各コース領域訪問を予定しており、これらの対応が功を奏すればよいと思われる。

5 結語的考察——「学校教育入門」の授業目標は達成されたか

5. 1 学部と附属学校園との連携、参観をめぐる問題

附属教育実践総合センター教員の田上は、2002年度と2003年度の2年間にわたって、附属学校園参観に関して日程等の連絡調整を行ってきた。本節では、学校園参観についてその役割

を通じて感じた問題点等ならびに、今年度の受講生の感想から読みとれる問題点をまとめる。

まず、学部と附属学校園の連携についてである。昨年度今年度とも、附属学校園からは参観に際した学生の身なり等についてのクレームなどが若干あるものの、学校園参観に関する否定的な意見は聞かれなかった。「学校教育入門」における学校園参観は、附属学校園においても定例的なものとして定着しているといえよう。但し、各学校園によって参観についてのとらえ方が異なるように感じられる。第1節で述べられた「学校教育入門」の理念、意義や目標について附属学校園との間で十分な共通理解ができているであろうか。学部と附属学校園の実務担当者が共通理解を図る機会をもつ必要がある。

また、従来附属教育実践総合センターの教員が、参観の日程等のコーディネートの役割を担ってきたが、できるだけ「学校教育入門」の授業担当者が日程とともに参観の内容についてもコーディネートをを行うことが考えられてよいだろう。これにより、毎年半数が入れ替わる授業担当者が附属学校園の教員と直接やりとりを行う機会が生まれる。煩雑な面があるかもしれないが、具体的ななかかわりを通して、「学校教育入門」だけでなく学部と附属学校園の全体的な連携の基礎を培うことができると考えられる。

次に、参観に関する学生の声から読みとれる問題である。附属学校園への参観そのものについては、学生は教職の理解のために重要なものであることを理解し肯定的にとらえている。しかし、参観をめぐる各部分には、いくつかの注文が見られる。まず、参観の時間の短さや回数の少なさ等日程にかかわる問題、次に子どもや教師とのかかわりの面等について附属学校園によって違いが大きいといった参観のあり方の問題である。これらの問題は、2004年度に向けての課題であるとともに、先に触れた附属学校園との間でこの授業の理念や目的の共通理解をどう図るかという問題でもある。また、附属学校園以外の公立校の参観を望む学生が少なからずあった。これは、「学校教育入門」授業の今後の改善の際、考慮に値する意見といえよう。

5. 2 全体会の運営

全体会は、受講者に本授業の目的や附属学校園参観の視点と心構え等を周知したりするガイダンスやオリエンテーションを主とするものと、参観→クラス討議を経て全体発表会を行うものの2種別である。

前者は、3回実施され学校教員養成課程と各コースの説明が各担当者によって行われた。その中で、現職教員によるシンポジウムも実施され、学生達からの活発な質問もあり、「本当の教師の姿が少し分かり、大変参考になった」等好評であった。

後者の全体発表会は、附属学校園を参観した後にクラス討議を行い、発表会までに各クラスで模造紙3枚程度に発表内容をまとめ（ポスター）、全体会で発表するもので、3回行われた。全体発表会会場は前年度と同様に2カ所とし、4クラスが一つの会場に集まって行われた（2年次生も2グループに別れ、それぞれ異なる会場で発表した）。

1クラスの発表時間は10分とし、質疑応答5分の計15分間で行われ、聴講している学生が発表クラスの発表内容、発表方法、ポスターのそれぞれについて「良かった、まあまあよかった、余りよくなかった、よくなかった」の4段階で評価すると共に、コメントを記入する用紙を配布し、授業後回収した。発表に対する評価の結果は授業世話係の教員がクラス毎に集計し、次の授業時には各担任からクラスの学生に結果が伝えられ、次回以降の発表に向けて活用できるように配慮した。

この全体発表会に対する学生の評価は、おおむね肯定的であったが、問題点も指摘された。以下に主な学生の回答を記す。

肯定的回答：

「他のクラスの意見を発表を通して聞けたのでよかった。」

「他のクラスのまとめを聞くことで、自分のクラスだけの意見以外にもいろいろな考えに触れることが出来、よかった。」

「7組の方（2年次生）は我々1年と違って教育のことを学んでいるから着眼点か少し違っていたり

して、全体会はいいい意見交換の場になっていたと思う。」

「自分では気づかなかったことが新たに分かってとても良かった。」

否定的回答：

「上手な発表のやり方をもっと具体的に教えてほしかった。」

「幼稚園・中学校訪問の発表を1回で、しかも10分でやれというのは厳しい。」

「発表時間がもう少しあるとよかったかも。」

「発表…事実の羅列、薄っぺらの考察はやめて欲しい。」

等であった。

これらのことから、発表会そのものに対しては好意的に捉えているが、発表時間や発表内容・方法について改善を迫る回答であった。具体的な解決方法については、簡単には見つからないが、例えば、学校訪問後のクラス討議の在り方やまとめ方等に対する担任教員の介入を強化する、全体発表会後のコメントを厳しくする。また、発表時間の不足については、ほとんどの班が全員（6人前後）で発表しているためムダが多く発表人数をしぼる事などが考えられよう。いずれにしても、限られた授業回数や時間内でよりよい成果を挙げるべき方法の検討が必要であろう。

5. 3 授業全般の今後の課題

以上、「学部と附属学校園との連携、参観を巡る問題」及び「全体会の運営」についての考察を終えた。いずれにしても全体的には満足度の高い授業ではあるものの、それぞれにおいていくつかの課題が残った。附属学校園と担当教員とのあいだで、この授業のねらいや意図するものについて、さらに共通理解を図る必要があるであろうし、受講生の声に答えるためには、具体的な問題に踏み込んで一つ一つ解決しなければならないであろう。また、学部の担当教員相互の意思疎通を図って、この授業の理念を喚起するための場も今以上に必要であろう。

また、アンケート結果に出ているように、従前のこの授業によっては「2年次以降のコース

選択」に対しては、必ずしも肯定的、確定的な作用を果たし得ていないことは明らかである。附属学園訪問という体験ならびにそれらの反省的考察が、自己の進路選択に有機的にリンクするようなガイダンスのあり方や制度の改善、運用の柔軟化が図られなければそれへの不安や不満は解消されないであろう⁶⁾。「このような教師になりたい」という学生一人一人の願いが満たされることが、「教職の意義」を真に理解することにつながって行く道であろう。

註

- 1) 「初等教育研究」は1991年度より開始されたが、当初は教育についての総合的なゼミナールという色彩が強かった。1996年度より附属学校園を参観し、その体験を討論していく「参加」型の科目へと内容・性格を変えていった。湯浅恭正（2000）、25ページ参照。
- 2) 長谷川順一・小方朋子・田上 哲（2003）参照。
- 3) 同 上。
- 4) 円グラフは、2003年（平成15年）度の各質問項目についての調査結果（5段階評価）を1年次生と2年次生に分けて示している。棒グラフの14-1、14-2、15-1、15-2とは、それぞれ14年度の1年次生、2年次生、15年度の1年次生、2年次生を示したものである。
- 5) 長谷川他、同 上。
- 6) 2003年度「学校教育入門」のガイダンスに関するまとめは、本誌の倉石文雄（2004）を参照されたい。

参考文献

- 1) 湯浅恭正（2000）『「学校教育入門」―主として、学校訪問とその意義』『平成10・11年度教職課程における教育内容・方法の開発研究：体系的な教員養成カリキュラムの在り方（最終報告書）』香川大学教育学部教員養成カリキュラム研究会 p p. 25-36
- 2) 長谷川順一・小方朋子・田上 哲（2003）「2002年度『学校教育入門』の授業評価」『香川大学教育実践総合研究』第7号、p p. 87-101.

付記

まずは附属学校園の授業担当の先生方にこの場を借りてお礼を申し上げたい。先生方のご支援のおかげで2003年度の「学校教育入門」も滞りなく終了しました。

大学における授業担当者は、有馬道久、伊藤正信、岡晋平、倉石文雄、黒田勉、小西憲一、桜井佳樹、瀬戸郁子、高倉良一、高木由美子、田中吉資、田上哲、永尾智、藤井昭洋、山下智恵子、湯浅恭正であった。その中でも2年目として本授業の運営の中心を担ったのは、授業世話係が伊藤、黒田、桜井、高倉、高木、田上の6名であり、ガイダンス担当が倉石、小西、田中の3名であった。本授業の運営に携わったすべての人に感謝すると共に、これまでの本授業に携わってきた多くの教員等の創意工夫なしには、実施されてこなかったことに改めて敬意を表し、今後ともこの授業のさらなる改善が図られることを願ってやまない。